

回心の内景

小野蓮明

一

「但使回心多念仏」というは、「但使回心」は、ひとえに回心せしめよということばなり。「回心」というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。実報土にうまるるひとは、かならず金剛の信心のおこるを、「多念仏」ともいうなり。「多」は、大のころなり。勝のころなり。増上のころなり。大は、おおきなり。勝は、すぐれたり。よろずの善にまされるとなり。増上は、よろずのことにすぐれたるなり。これすなわち他力本願無上のゆえなり。自力のころをすつというは、ようよう、さまさまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみ(身)をよしとおもうころをすて、みをたのまず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信染すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。具縛は、よろずの煩惱にしばられたるわれらなり。煩は、みをわすらわす。悩は、ころをなやますという。屠は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふるものなり。これは、り(狐)ようし(師)というものなり。沽は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。「能令瓦礫變成金」というは、「能」は、よくという。「令」は、せしむという。「瓦」は、かわらという。「礫」は、つぶてという。「變成金」は、「變成

は、かえなすという。「金」は、こがねという。かわら・つぶてをこがねにかえなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。りょうし・あき人、さまさまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、撰取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは、すなわち、りょうし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとしとたとえたまえるなり。撰取のひかりともうすは、阿弥陀仏の御ころにおさめとりたまうゆえなり。文のころは、おもうほどはもうしあらわし候わねども、あらあらもうすなり。ふかきことは、これにておしはからせたまうべし。〔真宗聖典〕五五二―三頁〕

最初に掲げたこの長い引文は、

彼仏因中立弘誓 聞名念我総迎來

不簡貧窮將富貴 不簡下智与高才

不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深

但使回心多念仏 能令互躒變成金

という『五会法事讚』の文のうち、あとの「但使回心多念仏 能令互躒變成金」の二句について、親鸞が、きわめて意味深い了解を述べられた『唯信鈔文意』の文である。ここには、親鸞がその晩年に到達し獲得した浄土真宗なる仏道の面目が、見事に語り示されている。回心、回心の内景、さらに回心に開かれる内実の世界が、力をこめて語り明されている。

「回心」——それは「自力の心をひるがえし、すつるをいうなり」と、親鸞は了解する。では、自力の心を翻し棄てたとき、つまり自力の心が翻され、自力執心の立場がその底から破られたときに、いかなる世界が開かれてくるの

であろうか。親鸞は、回心に開かれる本願の仏道の面目を力を込め大なる確信をもって、次のように語るのである。

自力のころをすつというは、ようよう、さまざまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのみず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

と。『唯信鈔文意』が最初に撰述されたのは、建長二年十月十六日、親鸞七十八歳の時といわれ（盛岡本誓寺本）、以後何回も書写され、現在知られているものが五回である。とすると、少くとも親鸞は、七十八歳以降、「ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」と語って、回心に開かれる本願の仏道の面目を、証大涅槃、ないしは大般涅槃道として了解されていたことを知ることができる。「信卷」の仏弟子釈で

「真仏弟子」と言うは、(中略)「弟子」とは釈迦・諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信・行に由って、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、「真仏弟子」と曰う。(『真宗聖典』二四五頁)と述べ、また『正信偈』に、

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。凡聖、逆謗、ひとしく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし。(『真宗聖典』二〇四頁)

と詠われているように、一念喜愛の信心の利益として「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」のであり、煩惱を具足しながら「必ず大涅槃を超証すべき」身となり、現生に正定聚不退の身となるのである。これが回心に開示される本願名号の仏道の面目である。だから親鸞は、本願の名号について、

この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかひの御(名)なり。(『真宗聖典』五四七頁)

と云って、一切苦悩の衆生をして「無上大般涅槃にいたらしめ、」大般涅槃道に立たしめる「大慈大悲のちかいの御名」として了解されたのである。

では、「具縛の凡愚・屠沽の下類」といわれ、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」といわれるわれら衆生が、「回心」において「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」といわれるとき、その回心とは一体いかなる出来事、いかなる事態であろうか。

『唯信鈔文意』は、

「回心」というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。

といい、『歎異抄』第二六条では、

一向専修のひとにおいては、回心ということ、ただひとたびあるべし。

と云って、その「ただひとたび」の「回心」を、

その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのころにては、往生かなくべからずとおもいて、もとのころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはもうしそうらえ。〔真宗聖典〕六三七頁)

と教えている。これらの言葉によれば、回心とは、「自力の心」を宗とする「日ごろのころ」では到底「往生かなくべからず」と思い知らされて、その「もとのころ」即ち「自力の心」を「ひるがえし、すつる」ことにおいて、「本願をたのみまいらする」身となること、乃至は、如来の本願との値遇において、「日ごろのころでは往生かなくべからずとおもいて、」「もとのころ」を「ひるがえし、すつる」ことである。要するに一言にして言えば、

自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。〔歎異抄〕第三条・

『真宗聖典』六二七頁)

といわれるように、「自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつ」という、回心転身を意味する。自力とは、

自力というのは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのみとなり。(『一念多念文意』・『真宗聖典』五四二頁)

といわれるように、「わがみ」「わがころ」「わがちから」を苦励して仏道を成就せんとして、「さまさまの善根をたのみ」人であって、『歎異抄』第三条で言われる「自力作善のひと」の立場である。それに対して、他力とは、

他力と言うは、如来の本願力なり。(『行巻』・『真宗聖典』一九三頁)

といわれるように、如来の本願力そのものの立場である。従って、「自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつ」ということは、文字通り自己の自己性に完全に死して如来の本願力に帰して生きる、転依転身の事実である。親鸞は、このような自己における挙体の転依の決定的な表白、即ち回心の告白を、

然るに愚禿積の鸞、建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。(『真宗聖典』三九九頁)

と、『教行信証』「後序」に記しているのである。

一一

「建仁辛の酉の暦」という時に、「真宗興隆の大祖」と仰ぎ続けた「よきひと」法然の「おおせ」に値遇し、その値遇を通して「愚禿積親鸞」と名乗る一人を成就し得た、その回心における挙体の転依を、「雑行を棄てて本願に帰す」と表白したのである。自力雑修の雑行を棄てて阿弥陀の本願に帰するとは、何よりも親鸞自らの回心の表白であるが、その回心は、「よきひとのおおせ」即ち法然の教言との値遇を、決定的な縁としていることは言うまでもない。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という、法然の「おおせ」との値遇に縁って、自力雑修の雑行をこ

ととして生きる存在のあり様を、その根底より摧破されて、阿弥陀の本願に帰して生きる新しき存在、念仏者親鸞の誕生を語り告げている。

ところで、「後序」の親鸞の回心の表白において、建仁元年という時に師法然の教言に出遇ったことを、「雑行を棄てて本願に帰す」と言い切って、存在主体の全き転依としてその現在の意味を確かめていることに、われわれは十分な注意をはらうべきである。というのは、「棄雑行」に対する言葉は、一般に「帰正行」乃至は「帰念仏」と考えられるからである。

かつて法然が承安五年、四十三歳の時に、善導の「散善義」就行立信の教言に出遇って、念仏に帰した回心を語る時、つねに雑行、余行に対して、正行、念仏をもって語っているのである。

ついに一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近念々不捨者、是名正定之業、順彼仏願故の文にいたりて、末世の凡夫弥陀の名号を称せば、かの仏の願に乗じて、たしかに往生をうべかりけりといふことはりをおもひさだめ給ぬ。これによりて承安五年の春、生年四十三たちどころに余行をすて、一向に念仏に帰し給ひにけり。『法

然上人行状絵図』第六・『法然上人伝全集』二四頁・傍点筆者

然れば西方の行者、須く雑行を捨てて正行を修すべきなり。『選択集』・『真宗全』一・九三八頁・傍点筆者

是において貧道、昔茲の典を披閲してほほ素意を識り、立ちどころに余行を捨ててここに念仏に帰しぬ。それより已来今日に至るまで、自行化他ただ念仏を諱とす。(同・九九三頁・傍点筆者)

法然が自らの回心を語り、また回心を勧めたこれらの文に注意するとき、「雑行」「余行」に対する言葉は、いつでも「正行」あるいは「念仏」である。善導の「一心専念弥陀名号」という教言に出遇うて、その仰せの如く「念仏に帰す」というのである。そこには、「一心に弥陀の名号を専念せよ」と呼びかけられて、仰せの如く「念仏に帰す」という、見事な教えとの呼応がある。

しかし、何故に弥陀の名号なのであろうか。思うに、弥陀の名号が「正定の業」である所以は、善導においては偏
えに「順彼仏願故」の一点にあった。従って、法然が善導の「一心専念弥陀名号」の教言に遇うて、「たちどころに
余行を捨てて一向に念仏に帰し給うたのは、選択本願の念仏に帰したのであり、選択本願に帰し、如来選択の願心
に帰したことに他ならない。法然においては、帰念仏は選択の願心に帰したことで決して別ではなかった。そのこと
は、法然自身の深い感慨を込めた述懐がよく伝えている。自ら念仏者と転成していった身の転依を語った『和語灯
録』(巻五)の言葉に、

およそ仏教おほしといへども、詮ずるところ戒・定・慧の三字をばすぎず、いはゆる小乗の戒・定・慧、大乘の
戒・定・慧、頭教の戒・定・慧、密教の戒・定・慧なり。しかるにわがこの身は、戒行において一戒をもたもた
ず、禪定において一もこれをえず、智慧において断惑証果の正智をえず、これにて戒行の人師釈していはく、
「尸羅清浄ならざれば、三昧現前せず」といへり。又凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし、たとふるにさる
のごとし、まさに散乱してうごきやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智なによりてかおこらんや。もし無
漏の智剣なくば、いかでか悪業煩惱のきづなをたゞむや。悪業煩惱のきづなをたゞずば、なんぞ生死繫縛の身を
解脱する事をえんや。かなしきかなく、いかゞせんく。こゝにわがごときは、すでに戒・定・慧の三字のう
つは物にあらず、この三学のほかにわが心に相応する法門ありや。わが身にたへたる修行やあると、よろづの智
者にもとめ、もろくくの学者にとぶらふしに、おしふる人もなく、しめすともがらもなし。しかるあひだ、なげ
きく経蔵にいり、かなしみく聖教にむかひて、てづから身づからひらきて見しに、善導和尚の『観経の疏』
(散善義)にいはく、「一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故」と
いふ文を見えてのち、われらがごとのく無智の身は、ひとへにこの文をあふぎ、もはらこのことほりをたのみて、
念念不捨の称名を修して、決定往生の業因にそなふべし。たゞ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀

の弘願に順ぜり。「順彼仏願故」の文ふかくたましるにそみ、心にとどめたる也。〔真聖全〕四・六七九―八一頁〕

と述べられている。善導の「散善義」就行立信の「一心専念弥陀名号」の教言に出遇って、法然はひたむきな念仏者と転成した回心の様相を、前掲の引文は見事に語り告げているが、この述懐で見落してならないのは、「たゞ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀の弘願に順ぜり。「順彼仏願故」の文ふかくたましるにそみ、心にとどめたる也」と、回心の表白を結んでいることである。

法然は、「一心専念弥陀名号」という善導の「ただ念仏」の発遣の声に出遇って、その遺教を信ずるのみでなく、「あつく弥陀の弘願に順ぜり」と告白しているように、発遣の声に出遇った端的に決定的に如来選択の本願に帰したのである。決定的に如来選択の本願に帰し、その願心に自覚的に帰したからこそ、本願に立って、本願招喚の声のままに偏えに念仏に生きるものとなったのである。法然の「ただ念仏」の源泉には、「あつく弥陀の弘願に順ぜり」という、帰本願の明確な願きがあったのである。

そうであるとすれば、親鸞の「雑行を棄てて本願に帰す」という回心の表白は、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と一筋に本願念仏を教える法然の教言を通して、念仏者法然の拠って立つ念仏の源泉を、見事に自覚的にいい当てた表白であるといえよう。親鸞が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という法然の教言に出遇ったことを、簡明直截に「本願に帰す」と言い切ったのは、法然の「仰せ」の底に、「偏えに本願に帰して生きよ」という声を聞き当てて、如来選択の願心に呼び覚まされて生きる一人となった、根源的覚醒乃至は根源的な身の転成の事実を表明するものであるからである。「帰本願」とは、文字通り如来選択の本願に帰すということであり、本願として喚びかけてやまぬ如来の大悲願心の声に呼び覚まされて、本願の仰せのままに生きる主体への転換、阿弥陀の本願に帰依して生きる新しき存在への転成を語り告げている言葉である。「愚禿釈親鸞」と名乗る信仰の実存の成立と、その存在基底を、「雑行を棄てて本願に帰す」という端的な信仰告白として語ったのである。そして、その

ような根源的覚醒、自己実存の転換転成を、法然の教言に賜ったのであるから、親鸞は、法然をつねに終生「よきひと」と仰ぎ、

阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ

化縁すでにつきぬれば 浄土にかえりたまいにき 『浄土高僧和讃』・『真宗聖典』四九九頁

と讃詠されたように、実に如来の応化身として仰がれたのである。

如来の選択本願に帰し、如来の願心と呼び覚まされた回心の表白である「帰本願」は、「ただ念仏して」と一筋に念仏に帰した師法然の拠って立つ根源、乃至は念仏の源泉を、見事に聞き当てた親鸞の自覚的表白である。念仏の源泉が如来の選択本願であるということは、具体的には、『敦異抄』の表現でいえば、「念仏もうさんとおもいたつころ」とは「たすけんとおぼしめしたちける本願」そのものであるということである。「念仏もうさんとおもいたつころ、」——それは決してわれらに内在する自我分別心であろうはずはなく、むしろ、そのようなわれらの自我分別心を、その底より摧破して、いまわが身に噴出し現前する「たすけんとおぼしめしたちける本願」そのものの声である。すなわち、一切苦悩の群生海を我が国に生らしめんと招喚し続ける如来の大悲願心そのものである。「そくばくの業をもちける身」を、それにも拘らず、否、そうであるからこそ、その身に大悲同感して、「たすけんとおぼしめしたちける」如来の大悲願心の現前、躍動を身に感得するのである。それが念仏である。法然も親鸞も、善導、法然という「有縁の知識」に出遇って、その教言に導かれて念仏に帰し、念仏の源泉としての選択本願に自覚的に目覚め生きるものとなったのである。

三

回心における念仏者の誕生は、本願念仏を教説する師教との値遇を絶対無二の縁とするものであり、その教言に教

養されて本願招喚の勅命に覚醒して生きるものとなることである。

「雑行を棄てて本願に帰す」という回心の表白や、「回心というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり」と言われるように、「本願に帰す」という存在の転換には、「雑行を棄て」、「自力の心をひるがえし、すつる」ということがなければならぬ。しかし、修道の歩みにおいて自力の心を翻し棄てるという、いわゆる自力無効の自覚は、決して容易なことではない。何故なら、いかなる人にも自力執心への執拗な思いがあるからである。

一般に雑行とは自力の執心に立ってなされる万善諸行のことである。一切の行、一切の善を定善と散善に撰し、この定散二善をもって往生の行となし、発菩提心修諸功德する修道の努力を教説するもの、それが『観経』の頭の立場であるが、しかし「修諸功德の願により、至心発願のちかいにいりて、万善諸行の自善を回向して、浄土を欣慕せ」（『三経往生文類』・『真宗聖典』四七一頁）んとする道は、果してわれら凡愚なるものに可能なる道であろうか。煩惱成就のわれらにとって、それは所詮「万行・諸善の仮門」（『化身土巻』・『真宗聖典』三五六頁）にしか過ぎない。しかも親鸞が自ら述懐しているように、「万行・諸善の仮門を出でて」「善本・徳本の真門に回入して」（同頁）も、なお本願に帰して念仏する称名を、「本願の嘉号をもって己が善根とする」（同頁）という、深く暗い最も執拗な自力への執心を発見することとなるのである。植諸徳本の願とか至心回向の願と呼ばれる第二十願不定聚の機の内面に、親鸞は限りない執拗な執心を鋭く抉摘している。第二十願は、発菩提心修諸功德の破綻の自覚を跳躍板として選び取られた念仏の立場であるが、しかしいつしか「如来の尊号をおのれが善根として、みずから浄土に回向して果遂のちかいをたのむ」（『三経往生文類』・『真宗聖典』四七三頁）という、自力執心の回向の立場である。発菩提心修諸功德の立場に見られる自力性が、至心回向の願の機性においては、名号への執着として現われるのである。このことは、定散の破綻における罪障の自覚を跳躍板として開かれた筈の第二十願の機の主体も、その罪障の自覚における自己否定にも拘わらず、なおも罪障の根である自執性の支配する埒内を出でず、そこに支配する自力執心を末だ完全に脱し切っていない、と

いうことを意味している。自己の内に自己の根拠、或は根底を、あくまでも自己としてもつという「至心回向」の立場は、それだけとしては高次の我執の立場であって、一心帰命の信に見られる真に主体なる立場ではない。自己を自己実存の基底として残す立場、自己の根拠を自己の内に自己として与える立場——そういう「至心回向」に見られる自力の立場は、「帰本願」の立場ではなく、むしろ非本願の立場というべきである。

そうすると「自力の心をひるがえし、すつる」ということは、決して観想的抽象的なことではない。すでに掲げた『唯信鈔文意』の文に、

自力のころをすつと^(也)いうは、ようよう、さまさまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのまず、あしきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠活の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

と書かれているように、「自力の心を棄てる」ということは、最も具体的には、如来の回向との決定的な出遇いに他ならない。しかるに、如来の回向とは何であろうか。第二十願の至心回向と區別して、親鸞は、回向の主体を如来と了解する根源体験を本願成就文の「至心回向」の一句に訓み取られたのである。すなわち、本願成就文の「至心回向」を「至心に回向したまえり」乃至は「至心に回向せしめたまえり」という全く独自の訓み方をして、回向の主体を如来と了解し、「聞其名号、信心歡喜乃至一念、至心回向」の教説によって、われら衆生に発起する一心帰命の信は、如来の清淨願心の回向成就の事実そのものに他ならないということ、本願成就文は、要するにわれらの行信確立の原光景を語る教説であることを明らかにされたのである。『一念多念文意』に「至心回向」について、

「至心」は、眞実ということばなり。眞実は阿弥陀如来の御ころなり。

「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたえたまう御のりなり。〔真宗聖典〕五三五頁)

と、その意味深い了解を述べているように、回向とは、われら衆生に本願の名号が与えられている事実そのものであ

る。「設我得仏十方衆生」と呼んで、「若不生者不取正覺」と誓い続ける如来の大悲願心が、われら衆生の行信として回向表現される道理を表わす言葉が回向であるが、しかしわれらにとって、回向の端的な事實は、名号が与えられている事實である。

「無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号」との決定的な出遇い、すなわち、かの法蔵菩薩の願心が「念仏もうさんとおもいたつころ」として、われら衆生の上に現前し名告り出た、その端的な事實、それが親鸞の回向の了解である。法蔵菩薩の願心がわれらの上に南無阿彌陀仏と現前し現成した事實が回向であるとすれば、本願の名号が行信されるところに、如来の自内証の功德が回向表現されることも自然である。衆生の迷妄なる難度海を度し、無明の闇を破って、尽十方無碍光の世界に呼び帰さんとする如来の大悲願心の現前現成、それが「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」という、われらの上に南無阿彌陀仏と名告り出た名号との端的な値遇の時であるが、それは同時に、「すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり」といわれるように、如来自内証の無上大涅槃の功德が、われらに回向表現される時でもある。本願名号の信の一念に、虚妄の中に流転してきたわれらが、名号において現行する真如一実の功德を賜って生きるものとなるのである。すなわち「煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたる」身と転依し転成するのである。親鸞の鋭い智眼は、如来の大悲願心の根源底まで洞見して、如来自証の功德がわが身に回向表現される事実を鋭く自証し、その喜びを深い感動をもって語っている。『唯信鈔文意』と共に親鸞晩年の思想を語る仮名聖教の『尊号真像銘文』と『一念多念文意』のうち、まず前者では、不虛作住持功德の文を了解して、

「親仏本願力 遇無空過者」というのは、如来の本願力をみそなわすに、願力を信するひとはむなく、ここにとどまらずとなり。「能令速満足 功德大宝海」というのは、能はよしという、令はせしむという、速はすみやかにとしという、よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信する人の、そのみに満足せしむるなり。

如来の功德のきわなくひろくおおきに、へだてなきことを大海のみずのへだてなくみちみちてるがごとしと、たとえてまつるなり。(『真宗聖典』五一九頁)

と述べ、後者では、『論註』の「国土名字為仏事」の文を了解して、

これはこれ、かのくにの名字をきくに、さだめて仏事をなす。いづくんぞ思議すべきやと、のたまえるなり。安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめずしらざるに、信ずる人にえしむとしるべしとなり。(『真宗聖典』五三七頁)

と述べているのは、如来の、従って名号のもつ真実功德を、本願の行信に帰命した人の上に、「すみやかに」「もとめずしらざるに」「そのみに満足せし」められ、身の上に生き生きと開き示される事実を、親鸞は深い感動をもって語っている。われわれはこのことを決して見落してはならない。

四

「本願に帰す」という回心において、すなわち「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就」としての本願の行信において、如来の自内証である真如一実の功德を、わが身に賜って生きるものとなるのである。回心とは、虚妄の中に流転し続ける我が、「本願招喚の勅命」としての名号に喚びさまされて、名号において現行する真如一実の功德を賜って生きるものとなる、その転依の端的を表わすものであるが、その回心をわが身の体験として語るならば、それはさす挙体的な罪障の懺悔であろう。

信心における回心の内景を思うとき、私は善導の二種深信の教説を有難く思う。二種深信、それは一心帰命の本願の信の自覚構造を見事に語るものであるが、その自覚は、如来と自己との決定的な値遇の出来事を最も具体的に明らかに示しているといえる。

一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。〔真宗聖典〕二二五頁

という機の深信は、文字通りわれら衆生に救いの可能性のないこと、罪業の身の絶対性を語り告げるものであるが、それは自覚的には、煩惱によって業をおこし、その業によって曠劫已来生死海に流転して、今の自身と成ったという、我執の底知れぬ根深さ（歴史性）と暗さを時間性の面において自覚したものといえよう。機の深信は、われらの生死罪悪の根源、即ち如来に背き、その大悲心に帰投し得ず、却って自己に固執して自我性を主張し続けた、我執の無限性、絶対性の自覚である。しかもそれは、自己の存在の罪悪生死の自覚であると同時に、一切衆生の罪悪生死の存在性の自覚でもある。

しかし、このような機への徹底した深信は、同時に、眞実なる法においてある我への覚醒である。眞実なる法においてある我への覚醒が、端的にわが身を罪業の身と信知するという形で現前するのである。もともと「無有出離之縁」という機の深信は、生死流転の現実を出離したいという、限らない願生の心に裏づけられている。出離への願いのないところに、「無有出離之縁」の自覚が生ずる筈がない。しかも、この出離への願い、救済への願生心は、自己自身の出離の願いでありつつ、同時に、一切衆生の救済への願いである。「普く衆生と共に」という救済への志願である。

では、自己に即しつつ自己を超えて一切衆生の出離への願いとは何であろうか。それこそ「設我得仏十方衆生」と呼びかけて「欲生我国」と招喚し、「若不生者不取正覚」と誓い続ける阿弥陀の本願であり、一切苦悩の群生を我が国に生らしめんと喚ぶ、本願の名号そのものである。

二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を撰受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。（同頁）

といわれる法の深信とは、出離の縁あることなき身を信知する機の深信の根底において、深く領かしめられた願力への信知にもとづく出離の深信、「定得往生」の身の発見に他ならない。

しかし、このように言っても、「無有出離之縁」の自覚を基底として、はじめて「乗彼願力」の深信があるというのではない。むしろ自覚的には逆である。機における罪業の自覚は、「乗彼願力」の深信において真に成り立つというべきである。如来は、虚仮不実の衆生を契機として自らを対自化し、その法性の光において衆生は自らの罪悪生死を深信するのであり、また同時に、この深信において衆生は、自らの罪悪生死を超えしめられて「定んで往生を得るのである。親鸞は、善導の二種深信の教説を『愚禿鈔』に、

今この深信は他力至極の金剛心、一乗無上の真実信海なり。（『真宗聖典』四三九頁）

と言って、深信を「他力至極の金剛心、」即ち如来の清淨願心の回向成就としての信心の自覚内容であると了解して、第一の深信は「決定して自身を深信する、」すなわちこれ自利の信心なり。

第二の深信は「決定してかの願力に乗じて深信する、」すなわちこれ利他の信海なり。（同・四四〇頁）と述べているのである。『愚禿鈔』のこの了解によれば、機の深信とは、単なる自己の罪悪生死の自覚ではなく、真如法性の光において、出離の縁あること無き自身の現実を、その如実相において引き受ける真の主体、即ち本来の自己との出遇いを意味し、法の深信とは、無始已来如来に背いて生死海に流転し続ける我を撰して真に如来たらんとする、今現在の如来との値遇を意味する、といえよう。第一深信は、如来の願力における自身の発見であり、第二深信は、逆に自身における願力への目覚めである。前者において決定深信される機の自覚も、後者において決定深信される「乗彼願力定得往生」の確信も、ともに如来の願心の回向成就としての本願の信の自覚内容である。如来の願心の回向成就としての信心は、即自的には「自身」（機）の深信となり、対自的には「乗彼願力」（法）の深信であって、それは、自己の絶対否定即肯定としての信心における実存の転依転成を、最も具体的に語り表わしている。機法

の二種深信として語られる信心は、親鸞において「阿弥陀如来の清淨願心の回向成就」と了解されたように、それ自体が帰するところ「願」、すなわち如来の本願のはたらきであり、本願の自己展開に他ならない。

二種深信は、このように如来と自己の決定的な値遇を現わし、「無有出離之縁」の自己が「阿弥陀仏四十八願撰受衆生」という仏の願力に乗じて、「定得往生」の自己として絶対に転依転成される回心の内景を物語るものといえる。信心における自己の絶対否定即肯定の転成とは、自己の側からいえば、「自身現是罪惡生死凡夫」という罪業に統一され、罪業に有たれてある存在の実質性から、「阿弥陀仏四十八願撰受衆生」という仏の本願に所有されてある存在の実質性への転依であり、仏の側からいえば、罪業の自己に対しては絶対に超越せる仏が、それにも拘らず、否、それであるからこそ、曠劫以来、生死勤苦の本を抜かんとして我に大悲現来し、衆生を撰受して我が国に生らしめることにおいてのみ真に仏たらんとする、仏の現前現成である。

親鸞は、そのような回心転身の信心を「如来の清淨願心の回向成就」と了解し、その願心の回向成就したもう信心に立って、信心の自覚の由って来たる因位を、遠く如来の清淨願心にまで遡って尋ねるのである。「棄雜行兮歸本願」という回心において、自らを本願に帰せしめた因位・如来の願心を「竊かに」推求するのである。それが『教行信証』「信巻」の三心一心問答である。本願に誓われた三心と世親自督の一心とが回向成就として一である、という親鸞の独創的な推求である。いま注意したいのは、その中の論主の意をもって仏の願意を問う仏意釈の思念である。至心・信樂・欲生の三心釈において、虚仮不実にして清淨心もなく真実心もなく、無始已来無明海に流転し続けているわれら衆生の現前的事実への厳しい凝視が、直ちにそのような衆生を悲憫し続ける久遠来の清淨真実なる如来の大悲願心を深く尋ね当て、身に直観し発見しているということである。或は次のように言うべきであろうか。本願に帰した心に深々と自証せられる願心、それを親鸞は、一切苦惱の群生海を悲憐する如来の真実心(至心)・大悲心(信樂)・回向心(欲生)と了解して、この如来の願心に目覚め立って、今更のごとく自覚される衆生の現実を、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。(至心積・『真宗聖典』二二五頁)

無始より已来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂なし。法爾として真実の信樂なし。(信樂積・『真宗聖典』二二七―八頁)

微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし。(欲生積・『真宗聖典』二二三頁)

と捉えて、その全体を無始已来虚仮不実なるものと明証されたのである。しかし、このようなわが身の現前の事実の敵しい凝視が、却ってわが身の底を破ってわが身に発起し、現前現働する如来の大悲願心を、深々と自証するのである。

ここをもって如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。(至心積・『真宗聖典』二二五頁)

何をもってのゆえに、正しく如来、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念・一刹那も疑蓋雜わるることなきに由ってなり。(信樂積・『真宗聖典』二二八頁)

このゆえに如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念一刹那も、回向心を首として、大悲心を成就することを得たまえるがゆえに。(欲生積・『真宗聖典』二二三頁)

如来の真実心・大悲心・回向心と了解された本願の至心・信樂・欲生の三心の積において、そのいずれもが親鸞における法蔵菩薩の五劫思惟の本願と兆載永劫の修行の御苦勞の感得を物語る以外の何ものでもない。しかも親鸞が本願の三心の一々に法蔵菩薩の発願と修行を読み取ったのは、取りも直さず一心帰命の信に、遠く深い因位のあることの発見である。法蔵菩薩、それは如来の因位を現わす教説であるが、しかし親鸞においては、それは同時に、一心帰

命の信がわれら衆生に發起し、如来の願心が衆生に回向成就される因位の光景を語る教説であったのである。一心帰命の信がわれら衆生に發起する因位の光景、そこに見られるものは、何よりも虚仮不実なる衆生の自我執心と、そのような衆生を矜哀する清淨真実なる如来の願心との熾烈な闘いである。そして、ついに如来の大悲願心がわれら衆生の執拗な自我の執心をその根底より摧破し、それに打ち克って、われら衆生に發起してくる因位の光景、それがかの三心積であるといえよう。われら衆生の自我の執心がうち破られて、如来の願心が我に名告り、我に現行する、それが「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」であり、如来の願心の回向成就である。そして、親鸞が本願の三心の体を「至徳の尊号」に帰しているように、三心をもって現わされる如来の願心の世界は、具体的には「本願招喚の勅命」としての本願の名号の開示する世界なのである。従って、回心の内景に見出される内実は、偏えに本願の名号の開示する世界であり、如来の大悲回向の世界に他ならないのである。